

帯広の森に「もりの山」が誕生

市街地を望む展望広場が完成

問い合わせ みどりの課（市庁舎6階、☎65・4187）

昭和45年、第5代帯広市長の吉村博は、明治時代の開拓で失われた森を再現して、市民の皆さんに安らぎと潤いを与えたいとの思いから、「帯広の森構想」を打ち出しました。

昭和50年に帯広の森の設計図となる「帯広の森造成計画」を策定し、森づくりを進めてきた結果、今では面積406.5ヘクタールの雄大な都市公園として、皆さんに親しまれています。

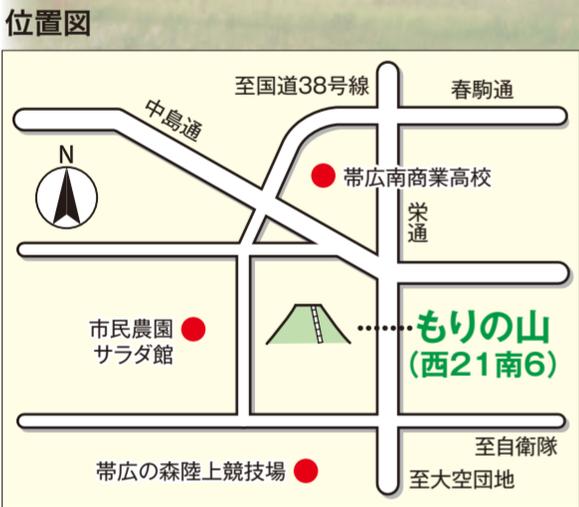
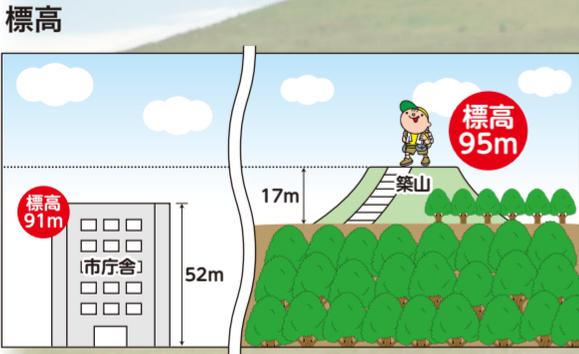
展望施設の整備に関する造成計画の構想をもとに、市内の景色を眺望できる数少ない立地を生かして、自然との調和に配慮した「築山」を造ることにしました。

市街地を眺望できる見晴らし

築山とは、人工的に造られた山



展望広場からの眺望



のことで、平成23年に工事が始まり、今年6月に帯広の森市民農園・都市農村交流センター（サラダ館）東側に完成しました。高さ17メートル、頂上の標高は95メートルで、市庁舎の屋上を回りまわります。山を造るために使った土の量は、11万2000立方メートルで、ダンプトラック約2万400台分、学校のプールに例えると約300杯分にもなります。山頂へと続く110段の階段は長さ約87メートル、山頂の展望広場は広さ163平方メートルで、ベンチ4基を設置しています。今後は周辺に、駐車場・トイレ・園路などを整備する予定です。



採用された大空小学校の児童（中央）

魅力あふれる眺望

- ・展望広場から市街地や日高山脈などが眺望できます。
- ・日暮れ後は展望広場までの階段をライトアップするので、夜間に展望広場へ行って夜景を見ることが出来ます。
- ・周囲には桜の木をたくさん植えていて、将来的には満開の桜を見ることが出来ます。

「もりの山」小学生が命名

今年3月に、帯広の森近隣の大空小学校、森の里小学校の児童を対象に名称を募集し、選考の結果大空小学校の児童が考案した「もりの山」に決定しました。

市長コラム

夢かなうまち おびひろ

こども学校 応援地域基金

帯広市長 米沢 則寿



帯広市では、子どもたちの健全な成長を支えるため、学校での学習支援や登下校時の見守り、放課後や休日の居場所づくりなど、学校・家庭・地域が連携した取り組みが盛んに進められてきました。保護者や先生と子どもたちとの関係を「タテ」、友達同士の関係を「ヨコ」と表現するならば、「ナメ」とも言える地域の大人たちとの関係が、こうしたボランティア活動を通じて育まれ、帯広の子どもたちの学びを豊かにし、地域の大人たちの生きがいづくりにもつながっています。

今年度からは、より多くの大人が参加し、地域の子どもを応援するための「こども学校応援地域基金」がスタートしました。個人や企業などからの寄附金を活用して、これまで以上に、多様な団体が連携して行う特色ある取り組みを支援することで、学校を中心に地域ぐるみで子どもを育てる活動が充実し、地域の活性化にも結びつけていく仕組みです。

昨今、地域コミュニティについては、人口減少・少子高齢化を背景に、人間関係の希薄化や担い手の減少などのマイナス面ばかりが強調されています。しかし、総人口に占める子どもと高齢者の合計人口割合の高まりを、生活の中心が身近な地域にある「地域密着人口」の増加ととらえ、コミュニティの新たな可能性を生み出す力になると考える識者もいます。学校・家庭・地域の連携は、そうした前向きな可能性を実現する手段になるのではないかと思います。

物の豊かさよりも心の豊かさが重視される時代を迎え、人々の価値観は多様化しています。こうした中で、誰もが幸せを感じながら暮らしていくためには、唯一の「正解」を追い求めるのではなく、試行錯誤を繰り返しながら、「何を大切にしていこうか」を徐々にすり合わせ、みんなで共有していくプロセスが重要だと考えています。

きれいな空気、おいしい水、豊かな農畜産物など、十勝・帯広の恵まれた環境に加えて、身近なコミュニティにおける人の絆を通し、大都会にはない人のぬくもりや心の豊かさを感じられること、支え合いによって、一人ひとりが主役となれる地域社会を築いていくことが必要ではないでしょうか。

こども学校応援地域基金を活用して、それぞれの地域において主体的に取り組む始めてみることで、人と人の緩やかなつながりや触れ合いが広がり、温かみを感じ、新しい何かが生まれてくることを期待したいと思います。